

④会津若松城

■千姫の「東慶寺の闘い」

東慶寺（神奈川県鎌倉市）とは本山を持たない独立した尼寺。

鎌倉幕府、執権、北条時宗の妻、^{かくさん}覚山尼が建立した。

北条時宗は、蒙古襲来（モンゴル帝国の侵攻、元寇）に対して、1274年^{ぶんえい}文永の役、1281年^{こうあん}弘安の役と二度も撃退した英雄だ。

夫婦仲はよく、1271年、嫡男、貞時誕生時には大喜びし、幕府や諸宗を批判し死罪を命じた日蓮を流罪に恩赦したほどだ。

国難を協力して乗り切り、貞時が引き継ぐと、^{かくさん}覚山尼は、力を持ち、格式のある広大な東慶寺を建立した。

そして、女人救済の寺とし、女人を守る政策も行った。

ここから、縁切寺が始まり、名を知られるようになり、続いた。

徳川幕府は、満徳寺（群馬県）と共に、過去の歴史を重んじていた。

1615年、大坂城炎上の中で、豊臣秀頼の妻、千姫は脱出した。

茶々・秀頼から家臣侍女を守るように願われての脱出だ。

将軍の父、秀忠、御台所の母、お江の元、江戸城に戻る。

そして、豊臣家滅亡後、残された者たちを守るために動く。

第一は、秀頼のたった一人の忘れ形見、奈阿姫（1609-1645）を守ることだった。

準備を整え、囚われの身の奈阿姫を我が子として守り抜く為に、江戸城に呼ぶ。

千姫は、6歳の幼い身で必死で乗り切った過酷な数か月を思い、奈阿姫を抱きしめた。

奈阿姫はつぶらな瞳で、千姫をじっと見つめ、哀しい経験を言うことはなかった。

すぐに、奈阿姫の命が守られるよう家康に直訴する。

秀忠、お江と話を付けていた家康は、豊臣家の血筋を残すことなく生涯独身であることを条件に助命する。

そこで、千姫は、女人救済の寺として有名な鎌倉の東慶寺に、奈阿姫を預けると決める。

家康に「生涯独身で生きるしかない奈阿姫を励まして欲しい」と懇請した。

家康も奈阿姫を哀れに思い「何か望むものはあるか」と聞いた。

奈阿姫（天秀）は「(修行すれば女から離縁出来る) 東慶寺法が末永く続くことのみ望みませう」と願う。家康はこの願いを聞き届けた。

こうして、徳川幕府公認の縁切寺として、改めて認められた。

家康からのお墨付があることが、奈阿姫（天秀）にとって最も価値あることだと千姫が、七歳の奈阿姫（天秀）に代わって家康に返書を出したのだ。

このお墨付が後にものを言うことは、このときは誰も知らなかった。

千姫から奈阿姫（天秀）へ、奈阿姫（天秀）から東慶寺への価値ある贈り物だった。

その後も千姫は奈阿姫を励まし続け、東慶寺への庇護も併せて経済的にも援助した。

1634年千姫寄進による仏殿が建立。

家光により自害させられた弟、忠長の屋敷が解体されると、その屋敷を客殿と方丈、大門等として移築する。移築には、千姫と春日局が関わっている。

千姫は家光の姉として身内で一番の発言力を持っていたが、具体的な差配は春日局が群を抜いて権力を持ち、仕切っており、任せた。

春日局は、忠長が好きだったし深い思い入れを持っており、喜んで移築を取り計らった。

こうして東慶寺は、豪壮・華麗な徳川家ゆかりの寺となる。

1627年、伊予松山藩主、加藤家は、会津若松藩主、蒲生家と入れ代わり、会津若松藩主となる。

違いは蒲生家が60万石だったが、加藤家は40万石になったということだ。

その前、1592年、蒲生氏郷が大大名の居城として築城を始め、92万石藩主にまでなった。

会津若松城は、92万石藩主の居城だったのだ。

だが、蒲生家は変遷し天災もあり、会津若松城は老朽化が進んだが修理する力がなかった。

そこで、幕府は加藤家に改修をさせようと、国替えしたのだ。

蒲生家、100万石の城として築城された城を引き継いだのは、40万石の藩主となった加藤嘉明（1563-1631）。城造りが好きで、名城を築くのを誇りとしていた。

近世城郭を普及させたのは秀吉だ。その築城技術は、非常に優れていた。

加藤嘉明は秀吉の信頼厚く、数多くの築城普請に関わった。

比べて、家康配下の東国大名は、経験が少なく、近世城郭の築城技術が遅れていた。

藩主、加藤嘉明は、秀吉の天下取りに貢献し、賤ヶ岳七本槍の一人として名将の誉れも高い。関が原の戦いでは東軍に付き、家康から四国松山藩 20 万石を与えられ、藩主となった。そこで、築いた居城、松山城は、嘉明が武将としてのすべての知恵と資金をつぎ込んで築いた名城だった。

松山城が完成し、成し遂げた喜びに浸っていた時の国替えだ。

幕府は 40 万石に加増した名誉もあり、石高も大幅増の条件の良い国替えだと申し渡した。だが、松山を愛し、松山城を終の居城だと考えていた、嘉明には喜びはなかった。

大藩の引っ越しには家臣たちを含め膨大な費用がかかる。

しかも会津若松城は、広大な城郭でありながら、情けない惨状だった。

加藤嘉明は、国替えの目的が城の修復だと重々承知しており、固辞するが所詮幕府の意向に逆らえない。

松山城築城は秀吉時代の貯えがあり、思う存分に築けたが、すでに蓄えは使い果たしていた。それでも、秀吉の威光を東国に示した大城郭が朽ちていき、天守が崩れたままの状況に耐えられなかった。

加藤嘉明と引き継いだ嫡男、明成は、身に余る 100 万石の大城郭を 40 万石の力で、莫大な費用をかけ、必死で修復した。

ほぼ修復を終える見込みが着くが、費用が足りない。

足りない費用は領民から取り立てざるを得なくなる。しかし、藩主の過酷な税の取立てに領民は激しい抵抗をした。

1631 年、嘉明が亡くなると、名君、嘉明に従い結束を誇った重臣の意見も分かれていく。明成（1592-1661）では家中をまとめきれなくなっていく。

家老、堀主文ほりもんどは明成に城の修復は止め、緊縮財政とするよう強く進言した。

だが、明成は、父の遺志でもあり、幕府に加藤家の力を見せつける改修を成し遂げると決意

を変えず、反対に、堀主文^{ほりもんど}を不忠者と責めた。

1639年、堀主文^{ほりもんど}は、家老職を取り上げられる。

身の危険を感じた堀主文^{ほりもんど}は、家族、親類縁者、家臣を連れて鎌倉へ逃げた。明成は、許さず、堀主文^{ほりもんど}らを討つと追手を差し向けた。

逃げ切れないと悟った堀主文^{ほりもんど}は、妻子を東慶寺の奈阿姫（天秀）に託し、身軽になって高野山へ向かった。

豊臣恩顧の武将にとって、東慶寺の奈阿姫（天秀）の名は知れ渡っており、堀主文^{ほりもんど}は一目散に東慶寺を目指したのだ。

一方、明成にも、東慶寺に堀主文^{ほりもんど}の妻子が居ることはすぐわかる。そして、奈阿姫（天秀）に妻子を差し出すように願う。

奈阿姫（天秀）は、頑として明成の要求には屈せず、事の次第を千姫に一報した。

千姫は家康のお墨付を後ろ盾に、弟、家光に事の次第を話す。

家光は、姉、千姫ととても仲が良く信頼しており全面的に支持した。そうになると、40万石大名、明成は、渋々引き下がる以外なかった。

奈阿姫（天秀）には太刀打ちできない明成だったが、堀主文^{ほりもんど}兄弟を連れ戻し、処刑した。

しかし、ことはそれだけでは、おさまらなかった。

家光は、大老、酒井忠勝を呼び協議させた。

その結果、加藤家に幕府に逆らう不穏な動きがありと、同時に明成の藩主としての統治能力に問題ありとの裁定となる。

このことを伝えられた明成は、1643年、所領の返還を幕府に申し出て、会津藩は加藤家から召し上げられた。

こうして千姫親子は「東慶寺の闘い」に一方向的に勝利にした。

加藤家は極悪非道な藩主だと、改易は人々の拍手喝采を浴びて支持された。

千姫親子の後詰である幕府の計略にかかった豊臣恩顧の外様大名が、また一人消えた。

豊臣秀吉の威光を示す会津若松城は、徳川の城として幕末を迎えるが、心は持ち続けた。

